

## 令和7年度第1回広島城天守の復元等に関する検討会議 議事要旨

### 1 名称

広島城天守の復元等に関する検討会議

### 2 開催日時

令和7年6月12日（木）13時30分～16時00分

### 3 開催場所

広島市役所本庁舎 2階講堂

### 4 出席委員等

#### (1) 委員

三浦正幸委員（座長）、金澤雄記委員、島充委員、鈴木康之委員、塚本俊明委員、橋本涼太委員、光成準治委員

#### (2) 事務局

広島市市民局長、文化スポーツ部長、広島城活性化担当課長、文化財担当課長、清水建設㈱、㈱文化財保存計画協会、㈱計測リサーチコンサルタント、㈱大崎総合研究所 ほか

### 5 議事（公開）

#### (1) 令和7年度検討会議開催計画について

#### (2) 広島城天守の復元等に関する検討結果について

- ・現天守の解体に関する検討（解体範囲の検討、施工条件の整理、文化財の保存を踏まえた現天守の解体工法等の検討、工程等に関する検討）
- ・天守群の復元等に関する検討（復元等の蓋然性の考証（天守、廊下等））

### 6 傍聴人の人数

3人（報道関係者を除く。）

### 7 資料名

- ・令和7年度検討会議開催計画 資料1
- ・広島城天守の復元等に関する検討結果について 資料2  
（現天守の解体に関する検討）
- ・広島城天守の復元等に関する検討結果について 資料3  
（天守群の復元等に関する検討）

## 8 各委員の発言の要旨

### (1) 令和7年度検討会議開催計画について

(三浦座長)

- ・議事(1)について事務局から説明をお願いします。

(事務局)

— 資料1を説明 —

- ・本検討会議については、広島城の現天守の解体及び天守群の復元等に向け、その技術的課題等について考古学的視点及び工学的視点から基礎的な検討を行うに当たり、有識者等から意見を幅広く聴取することを目的に、令和5年度から3年間をかけて検討することとしており、これまでに計5回開催してきた。
- ・最終年度に当たる今年度においては、本日を含めて4回の開催を計画している。
- ・具体的な内容は資料1のとおり。第4回の会議では、本検討会議の意見等の取りまとめとして最終報告を行いたいと考えている。

(三浦座長)

- ・質問はないか。

— なし —

### (2) 広島城天守の復元等に関する検討結果について

現天守の解体に関する検討（解体範囲の検討、施工条件の整理、文化財の保存を踏まえた現天守の解体工法等の検討、工程等に関する検討）

(三浦座長)

- ・議事(2)について事務局から説明をお願いします。

(事務局)

— 資料2を説明 —

- ・解体範囲について、基礎梁を一部残置する案（基礎底盤及び基礎側梁並びに基礎梁の一部を残し、基礎梁の残部及び床スラブを解体撤去する）を最有力案として、検討を行った。
- ・文化財の配置状況について、整理を行った。
- ・搬入ルートについて、裏御門から腰曲輪を通過してアプローチする腰曲輪ルートと内堀北側の外から堀を横断してアプローチする堀横断ルートの2案について整理・検討を行った。
- ・現天守の解体に当たって関係すると思われる文化財保護法、労働基準法及び大気汚染防止法等について、規制内容や留意点の整理を行った。
- ・文化財の保存を踏まえた現天守の解体工法等について検討を行い、工程の整理を行った。

## 解体範囲について

(三浦座長)

- ・まず、解体範囲について、意見等があればお願いします。

— なし —

## 解体の工法及び搬入ルートについて

(鈴木委員)

- ・文化財への影響等について、解体のみではなく、復元も加味し、トータルで検討すべきだ。堀横断ルートにしても、構台等は、その後の復元でもおそらくそのまま利用するだろう。解体と復元を一体で計画しないと、それぞれ評価することが難しい。

(事務局)

- ・鈴木委員の意見はもつともである。今回は解体の搬入ルートということで示したが、これで決定というわけではない。今後、復元の検討もしていくため、その中で搬入ルートを改めて見直すことも必要になると思っている。

(鈴木委員)

- ・今回は解体の検討・計画を行っているが、今後復元の検討を行う際に、今回の解体計画が難しいとなった場合には、もう一度最初に戻って解体の計画から作り直すということか。

(事務局)

- ・今回、解体をテーマに搬入ルートの検討を行ったが、その後の復元もある程度想定したものとしている。例えば、地下遺構等の文化財への影響について、使用する重機等の重量の観点からは、解体において問題が無ければ、復元においても問題は生じないと考える。また、復元においては、長尺木材の搬入について考える必要があるが、これについても直線的なルートとすれば対応が可能である。

(鈴木委員)

- ・今の説明でもまだ分からないところがある。やはり、搬入ルートの検討については、復元も含めて全体的に検討しないと文化財への影響を判断しにくい。
- ・また、復元は文化財の理解につながる貴重な機会であるため、一般の方がその過程を見学できるよう、見学ルートについてもあらかじめ考慮する必要がある。こういったことを含め、トータルで計画を立てるべきである。

(三浦座長)

- ・鈴木委員の意見については、しっかり検討して計画に反映してほしい。
- ・仮設等に関して、解体と復元で違う点が2つある。1つは、木材についてで、復元時は長い材を搬入する必要があるが、通らないということはないだろう。
- ・もう1つは、木造で建てる際の仮設の覆い屋（素屋根）の必要性で、仮設構台

の上に建てなければならないため、素屋根の骨組みを支えられるよう構台の設計を行っておく必要がある。

(島委員)

- ・素屋根について、解体時から建てるという考え方はあるのか。

(事務局)

- ・可能性としてはあるものの、素屋根を架けてしまうと使える揚重機の重量等に制約が生じる。

(三浦座長)

- ・素屋根は建設中に木材が雨で濡れてしまうことを防ぐためのものであり、基本的に解体時は不要である。

(橋本委員)

- ・天守群を復元する場合、現天守がある範囲だけの問題ではなくなるが、今挙げられている2つのルート案は、その場合でも対応可能という認識でよいか。

(事務局)

- ・天守群を復元する場合は本丸内側から作業を行うための構台が必須であり、そういったことも踏まえて今回の検討を行った。

(鈴木委員)

- ・粉じんや、騒音、場合によってはアスベストへの対応についても素屋根無しで可能という理解でよいか。

(事務局)

- ・粉じんなどについては、通常の解体工事同様、素屋根で全てを囲まなくても対応可能と考える。

(光成委員)

- ・木造で復元する場合には長尺の木材があり、直線のルートが必要になるとのことだが、堀横断ルートは直角に曲がっている。問題はないのか。

(事務局)

- ・堀横断ルートは自由度が高いため、十分対応可能と考えている。

(金澤委員)

- ・天守台石垣が崩れないことが前提であると思う。以前の調査で石垣は健全な状態であるということが確認されており、今回の解体工事による振動も震度2程度のため安全であろうということだが、石垣上のコンクリート天守を解体した事例はなく、本当に問題がないか分からない。例えば、変位測定器をつけるとか、石垣がずれないように何らかで押さえておくとか、石垣が崩れないような対策が必要ではないか。

(事務局)

- ・工事の際、変位測定器を設置し、石垣の動きを測定するという手法はよく使わ

れているものと認識している。また、今回、防護構台そのものは石垣と接しない形で検討しているが、もう一つの方法として、防護構台から石垣を支えることも考えられるため、今後検討していきたい。

**(三浦座長)**

- ・名古屋城の鉄骨鉄筋コンクリート造天守の解体について、同じようにブロック解体工法で解体する場合の振動を試算した結果、震度1以下ということだった。今回それよりも大きめの結果となっているが、もう少し小さくなるのではないか。

**(事務局)**

- ・名古屋城での試算内容は想定される振動が50db程度であったと思う。今回、石垣の修復現場で使用されている機械の振動と広島城の石垣の健全性を踏まえ、広島城独自のものとして算出した。

**(三浦座長)**

- ・搬入ルート（腰曲輪ルート及び堀横断ルート）について、意見をもらいたい。

**(鈴木委員)**

- ・腰曲輪のルートについて、史跡の範囲内であるが、発掘調査がほとんど行われていないため、地下にどのような遺構があるか分かっていないところが多い。その点は十分に精査していかなければならない。
- ・また、遺構の有無にかかわらず、本丸という遺跡の上を重機等が何往復もすることによる影響は不明であるため、腰曲輪ルートは、できる限り避けてほしい。

**(光成委員)**

- ・腰曲輪ルートと堀横断ルートの比較に当たり、工費に大きく差が出るのであれば、それも1つの検討材料にしなければならない。

**(事務局)**

- ・堀の水を抜いたり、現在ある堀底の防水層を改修したりしないといけないなど、腰曲輪ルートよりもいろいろなものが付随して必要になるため、堀横断ルートの方が高額になると見込まれるが、まだ積算をしていないのではっきりしたことは分からない。

**(光成委員)**

- ・そこがはっきりしない中では判断が出来ない。

**(鈴木委員)**

- ・堀横断ルートに関して、内堀北側も一部史跡の範囲内であり貴重な遺構であるため、十分な配慮をしてほしい。まだ当該範囲の調査が十分にできていないため、その辺りへの考慮も重要になってくると思う。
- ・内堀の底は、今までの色々な経緯の中で改変を受けているが、具体的な改変内容とそれを受けた状況の記録は残っていないと思う。改変を受けていても事前

の調査は必要になってくると思うため、配慮をお願いしたい。

**(三浦座長)**

- ・堀の改変については、堀の底に何かを張ったという報告書を見たことがあるため、今後、調べてもらいたい。内堀北側の史跡範囲外の部分についても、広島城の外郭であったところであるため、堀横断ルートを採用する際には、当然、調査が必要になると思う。

**(島委員)**

- ・腰曲輪ルートは、観光客など一般の人が使うルートと重なっている。復元まで考えると、10年近くの間、大型重機が通ることになると思うため、一般の人の安全をどのように確保するかということが大きな課題に感じる。

**(金澤委員)**

- ・木造復元を行う場合、木材加工場のような大きな建物が必要になると思う。天守台下本丸上段側に造ることや基町高校の前に造りスロープで木材を搬入することが考えられるが、後者の場合、堀横断ルートの方が考えやすいと思う。

**(島委員)**

- ・腰曲輪ルートは、場合によっては樹木の剪定が必要になるため、景観が変わってしまう恐れがある。
- ・天守台の石垣の下に、原爆で折れたスギの木の切り株と思われるものが今も残っている。また、腰曲輪にも、被爆前の古い樹木であろうと思われる切り株がいくつかある。今後、上位計画である「史跡広島城跡整備基本計画」の中で景観について検討する際に、景観を復元するために同じ樹木をそこに植えるということもあるかと思うため、本丸の中を通すルートとする場合には樹木調査が必要だと思う。

**(三浦座長)**

- ・これまでの意見を踏まえ、腰曲輪ルートと堀横断ルートのどちらが望ましいか意見をもらいたい。

**(鈴木委員)**

- ・私の立場としては、史跡の範囲内、遺構の上を、重機が何往復もするのは避けてほしいため、どちらかといえば堀横断ルートの方が望ましいと考える。

**(島委員)**

- ・現時点の情報では、自由度が高い堀横断ルートの方が望ましいと思うが、費用が大幅に嵩むということであれば、理解がどれだけ得られるかということがある。ただ、工事期間が長期になることを考慮すると堀横断ルートの方が一般人への影響も少ないと考えられるため、やはり、費用に関してどれだけ理解を得られるかということが課題になってくると思う。

(光成委員)

- ・工費のことを言い出したのは私だが、安い方がよいという主旨ではなく、島委員が言ったとおり、工費が高くなることに対する理解がどれくらい得られるかというところによると思っている。理解が得られる程度の差であれば、堀横断ルートの方がよいと思う。

(橋本委員)

- ・自由度が高い堀横断ルートの方が、想定外のことにも対応策を考えやすいため、現状では、堀横断ルートの方がよいと思う。

(金澤委員)

- ・作業員と一般の人の安全が一番大事だと思っている。作業効率の面では堀横断ルートがよいと思っており、作業効率がよいということは作業員の安全にもつながる。また、一般の人と動線が交わらないことも考えると、少々費用が高くても安全第一を考えて堀横断ルートがよいと思う。

(三浦座長)

- ・堀横断ルートがよいという意見が多いため、この委員会の意見としては、堀横断ルートの方が望ましいと提言することとする。

(3) 広島城天守の復元等に関する検討結果について

天守群の復元等に関する検討（復元等の蓋然性の考証（天守、廊下等））

(三浦座長)

- ・議事(2)について事務局から説明をお願いする。

(事務局)

— 資料3を説明 —

- ・天守及び廊下等について、保存図や古写真等による考証を行うとともに、類例建築遺構との比較検討を行った。
- ・天守及び廊下の復元図を作成した。

(島委員)

- ・東廊下について、保存図の考証の後すぐに城内類例の整理となっているが、本来であればここに古写真の観察という項目がないといけない。
- ・例えば、保存図ではわからない東廊下の北面の窓について、復元図を見ると縦板張りの上端と窓の上端が揃っているが、何枚かの古写真では、樹木で隠れて見えにくいものの、ほかの城内の多聞櫓等と同じように、腰板張りの上端より窓が飛び出ていることが確認できる。古写真の観察をもう少ししてもらいたいと思う。
- ・また、実測図面には出てこない部分であるが、玄関と書いてある階段の覆い屋のところ、片流れの屋根と廊下の壁が接する部分に、高窓が写っているような

古写真もある。

- ・復元図では、東廊下北面 2 階の窓を描き落としている。また、玄関のところ、古写真では外観において母屋の先端が破風板から見えているが、これを保存図は描き落としている。これらについて、古写真をもう一度よく観察し、保存図と擦り合わせる必要があると思う。
- ・被爆後の東廊下の写真を見ると、内部の木材がかなり露出している。例えば、復元図の東廊下梁間断面では、真ん中の母屋に架かっている梁の先端が、南側の梁に載った束と接したような描写になっているが、被爆後の写真を見ると、この梁の先端に切り込みが入っていて、この束を挟み込むような独特な状態になっていることが分かる。
- ・また、同じ断面で、階段のところの石垣の面に下見板が張ってあるが、被爆後の写真を見ると、南廊下にも同じような板張りがあり、そちらは縦板張りになっているのだが、爆風の向きから、南廊下では、この石垣に張られた板がそのまま残っている。ところが、玄関の方の破壊状況を見てみると、そこには全く板が残っていない。そもそも板が張られていなかったという可能性もあると思う。
- ・玄関に床が張られているが、発掘の結果では、土間の構築跡があったというような記載を見たので、床が張られていなかった可能性もあるのではないかと。被爆後の写真を含めてもう少し細かく古写真の調査を行ってほしい。

(事務局)

- ・もう一度古写真を確認したいと思う。

(三浦座長)

- ・資料の中で使用している保存図について、姫路市立城郭研究室所蔵のものと奈良文化財研究所所蔵のものがあり、立面図・断面図と平面図で使い分けているようだがなぜか。

(事務局)

- ・意図して使い分けているわけではない。奈良文化財研究所所蔵のものが元々あったもので、姫路市立城郭研究室所蔵のものがそれを複写したものだとして認識している。奈良文化財研究所に残っている立面図・断面図についてはそちらを優先して使用しているが、残っていない平面図については姫路市立城郭研究室所蔵のものを使用している。

(三浦座長)

- ・他城郭では保存図は 1 セットしか残っていないことが多いが、なぜ 2 セット残っているのか。

(事務局)

- ・姫路市立城郭研究室がまだ存在しない時代に、姫路城修理事務所が中心となっ

て全国の城郭の修理を行っていた関係から、姫路城修理事務所の職員が元々あったものを複写したとのことである。

(島委員)

- ・南廊下について、1階の屋根勾配は本来、東側と西側で違う。1階の西から2番目の柱、9.53尺入ったところの柱の芯と、2階の柱の芯がずれているということも原因としてあると思うが、1階の屋根それぞれを延長した場合、上の立面図にあるように1階の棟の位置は2階の中心からずれるはずである。実際、古写真でも、この屋根勾配は東と西で違っている。ところが、復元図では1階の棟の位置がずれておらず、2階と1階の棟の位置が真ん中でそろっている。これはどこでどういう調整を行ったのか。

(事務局)

- ・保存図について、そもそも軒の出が東と西で違い、また、勾配も違っている部分があり、梁間方向の断面図として見てよいか、若干疑問があった。そのため、復元図では、一旦、中心部分をそろえて描く形にしている。

(島委員)

- ・南廊下の石垣天端を見てみると、南に向かって若干広がっており、この南の方で中心を取った可能性がある。
- ・中心の軸のずれについて、検証が必要だと感じている。

(事務局)

- ・中心の軸がずれているかどうかの点も含めて、もう少し検討をしたいと思う。

(三浦座長)

- ・広島城の天守は1階の平面が日本の天守の中で一番歪んでおり、その歪みを解消するために現場でいろいろな調整をしていたと思う。その現場調整の全てを図面と写真だけで理解することはなかなか難しいが、全てを総合して一応納得ができるような説明を考えてもらいたいと思う。
- ・天守に高窓があるが、これは鉄砲を撃った時の排煙のためのものである。現存で天守に排煙窓があるのは、姫路城と宇和島城しかなく、広島城は図面や写真で見ることができる。宇和島城と姫路城の場合は、この排煙窓の内側に戸走りがついているが、広島城の高窓の場合、図面を見る限り、戸走りのような窓を閉めるための装置がなく、開放されたままであったようである。これについては、図面ではそうなっているが、本当にそうだったのか、今後、検討してほしい。

(島委員)

- ・天守の高窓に関連して、保存図では、下見板の上の白壁が下見板の水切りに向かって曲線を描いており、独特の形状になっている。現天守では、それを正確に再現しているが、高窓の部分を斜めから見た時に、本当にそのように曲がっ

ているのだとすると、高窓の影の裾の部分が手前の白壁で丸く切れるはずである。しかし、どの写真を見ても、高窓が真っすぐになっている。実際に保存図のおりの曲線を描いていたのか、疑問である。今の天守の高窓の見え方と比較するとよく分かるので、検討してもらいたい。

- ・軒先の高さが違うことについて、熨斗瓦が傾斜しているということは確かにそうであるが、明治期の一番古い写真を見ると、熨斗瓦は水平になっている。それがいつの間にか傾斜しており、改変があったかどうかということがある。ただ、軒先の高さの違いは、明治期から明らかに確認されているため、元からあった違いであると思う。
- ・外壁の下見板について、今回、本丸東北隅の二重櫓の古写真を参考に1間四つ割りとしているが、明治期の古い写真では簷子の数は変わっていないと思う。1間四つ割りとするのは、少し勇み足ではないかと思う。
- ・個人的な考えではあるが、どの城郭を見ても、天守は格別に造られている。垂木の枝割の数や下見板の簷子の数を変えるなど、さまざまな方法で他の櫓とは違う格別の仕上げにしている所が多い。城郭において非常に感じる事として、当時の美意識もあると思うが、多様性、つまり、他とは重ならないものを造っていくという中で、当時の格式や型を破るということがあった。遊びというか、歪んだものを美しいと思う茶の湯の美意識等も関係するのかもしれないが、あえて何かを歪める、左右非対称にする、格式を入れ替えるという遊びをいろいろやっていると感じている。
- ・それを踏まえると、あえて簷縁を疎らにしたり、縦板張りにしたり、他の櫓に見られない意匠を取り入れているような気がする。しかしながら、狭間が隠れてしまっていることから、後補である可能性もあるため、考証が必要であると思う。
- ・復元図において、外観の広い範囲で、古写真にない変更が加えられているが、もう少し根拠が必要であると思う。推定でここまでの変更をしてもよいものかという気がする。
- ・天守の軒反りについて、保存図の曲線が本当に正しいのか疑問に思っている。古写真を見てももう少し反りが強いように感じるため、古写真の軒反りの曲線の抽出といったこともしてもらいたいと思う。

#### (三浦座長)

- ・今まで、広島城天守についてこれほど詳細に分析した例がない。今回の復元考証については、高く評価できると思う。今後の南小天守や東小天守の復元考証についても期待したい。

#### (事務局)

- ・本日の意見を参考に引き続き広島城天守の木造復元に向けた検討を進めていき

たい。

- ・特に、蓋然性の考証等については、古写真等の詳細な検討も進めていきたい。
- ・次回の検討会議については追って連絡する。
- ・必要に応じて個別に相談することもあると思うので、指導・協力をお願いしたい。